

重点取組分野	令和4年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①学力・学習状況調査等の結果分析や学年グランドデザインに基づきカリキュラムマネジメントに取組む。 ②各教科等で、児童の問題発見・解決能力を育成する授業づくりに取組む。 ③ICT活用や時程の工夫により、さらに質の高い柔軟な教育課程編成に取組む。	①UCL等を通してグランドデザインを意識した授業づくりを行ってきた。引き続きグランドデザインを見直しながら、目指す姿を明確にして授業づくりに取り組んでいく。 ②特に問題発見を今年度からのテーマとし、各教科・領域で意図的に問題発見の場面を位置付けた。 ③ICT活用や時程の工夫により、放課後の時間をスマートに活用することができた。	B
豊かな心	①自らを振り返り、よりよく生きようとする豊かな心を育むため、学級経営を基に道徳の時間の充実を図る。 ②豊かな感性が育まれるよう、地域など様々な方々と関わり、「本物」に触れるような体験的活動を行う。 ③相手を思いやる心を育むため、子どもが主体的に活動できるフレンドチーム等、交流の場を設定する。	①自らを振り返り、よりよく生きようとする豊かな心を育むため、学級経営を基に道徳の時間の充実を図ることができた。 ②豊かな感性が育まれるよう、地域など様々な方々と関わり、出前授業やゲストティーチャーを招いて「本物」に触れるような体験的活動を行うことができた。 ③相手を思いやる心を育むため、フレンドタイムでは、子どもが主体的に活動できるよう、掲示板を活用できた。全校連立に向けて段階的にフレンドタイムを設けて充実した交流活動を行うことができた。	B
健やかな体	①一校一実践として、体育での短縄跳び、〇分間走など個の持久力が高まる運動を継続的に実施する。 ②心と体の成長のため、保健や体育の授業の充実を図り、生涯、生きてはたらく力となるよう支援する。 ③給食指導を中心に様々な教科・領域を通して、食育の充実を図る。	①5年生は、半リンピックのリズム縄跳びを継続して取り組んだことで体力の向上につながった。縄跳びは、上手に跳べるようになってきた。持久走は、自分のペースで長く走ることが難しい児童が多い。②養護教諭と連携して保健の授業の充実を図ってきた。 ③コロナ禍でも異学年交流の活動、例年通りに行っている内容に近くなってきた。多少の制約はあるが、主体的に活動できていると感じる。家庭科、生活科、総合、学活などで食育の充実にも取り組んでいる。	B
地域連携	①保護者、地域と、牛っこだんぼを通して、生活・総合など学習を中心に積極的に関わり、関係を深める。 ②地域を愛する子どもたちを育成するため、地域の行事等に子ども、教職員もできる限り参加する。 ③学校の様子、子どもたちの学び、活動を地域に発信していく。	①生活・総合などの学習を中心に人だけでなく、地域の行事や施設などと関わり、関係を深めることができた。 ②地域の行事等に授業を通して関わり、地域の人やその人々の営みに気づき、行事などに参加する機会が増えた。 ③20周年行事を通して地域と関わったり、学年だより、HP等で発信したりした。	B
いじめへの対応	①子ども主体となるよう、いじめ未然防止の話し合いを代表委員会や子ども会議で行い、活動につなげる。 ②ハートフルウィーク、生活アンケートを定期的に行い子どもの実態を把握し、早期発見、解決していく。 ③意図的に教職員の研修を行い、スキルアップを図る。	①日常的な学級指導や、道徳、社会的スキル横浜プログラム等を使っていじめの未然防止の話し合いを実施することができた。子ども会議に出席はしたが全校への発信ができていなかった。来年度は全校発信を行う。 ②ハートフルウィーク、生活アンケートを定期的に行い子どもの実態を把握し、早期発見、解決につなげることができた。 ③本校の実態に合う事業を用いて、教職員の研修を行い、スキルアップを図ろうとした。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチームにミドルリーダーや主幹教諭が関わることで、指導力、授業力の向上を図る。 ②日課表やチーム学年経営による一部教科分担当制など工夫改善を行い、教職員の裁量の時間を確保する。 ③主幹会、教務会、学年主任会、UCL(共同研究)等、ベテランの教職員のよさが生きる組織運営を行う。	①ミドルリーダーや主幹教諭が関わることに加え、教科や分野の専門の講師による指導助言もいただき、指導力、授業力の向上を図ることができた。 ②日課表やチーム学年経営による一部教科分担当制などで教職員の裁量の時間を確保することで、児童理解や教材研究の準備を進めることができた。安定した学級経営や授業の質の向上につながった。 ③様々な組織運営を進めることを通じて、教職員同士で意見交換を行い、互いの強みを生かすことができた。	A
特別支援教育	①配慮を要する子の個別の指導計画を保護者と共通理解の上、作成し、その子に応じた指導支援を行う。 ②特別支援教室では、子どもの困り感に寄り添い、国語・算数を中心に基礎基本の習得をめざす。 ③SCやSSW、子ども家庭支援課など外部機関との連携し、保護者も含め個に応じた適切な指導支援を行う。	①配慮を要する子の個別の指導計画を保護者と共通理解の上、作成し、その子に応じた指導支援につなげようとした。 ②特別支援教室では、子どもの困り感に寄り添い、国語・算数を中心に基礎基本の習得をめざした。 ③SCやSSW、子ども家庭支援課など外部機関との連携し、保護者も含め個に応じた適切な指導支援につなげようとした。	B
人権教育 児童指導	①人権教育を人権週間等を中心に学年に応じて系統立てて学ぶ機会を意図的につくる。 ②月別目標やあいさつ運動など子どもが主体的に児童会で話合ったり発信したりするよう時間を確保する。 ③児童指導に関する諸問題を随時、専任を中心に教職員全体で実態を把握し、組織的に対応する。	①人権週間では、外部講師を招いての授業を行うなど、子どもが実感をもって人権について考えられるような機会を、学年に応じて意図的につくることができた。 ②月別目標やあいさつ運動など子どもが主体的に児童会で話合ったり発信したりするよう時間を確保する。 ③児童指導に関する諸問題を随時、専任を中心に教職員全体で実態を把握し、組織的に対応することができた。	B
未来を拓く志	①「人・もの・こと」にこだわり、本物との出会いを大切に生活科・総合的な学習の時間の授業をめざす。 ②「分かる」楽しさ、「できる」喜び、「認められた」心地よさを感じる魅力ある授業をし自己肯定感につなげる。 ③話し合い活動の充実を図り、価値観が違っても、協働して困難な課題に立ち向かおうとする力をつける。	①UCLの実践を通して、本物との出会いを大切に授業づくりをした。また、出会いから生まれる問いを見たり、問題発見する力の育成を目指した。 ②教師側が意図して授業づくりをすることができたが、子どもがどのように感じ、自己肯定感をつなげているかは検証が必要であった。 ③価値観の違いを埋め入れて活動できる姿が見られた。今後はさらに協働して困難な課題に立ち向かおうとする力を育成していく。	B
安全管理	①PTA、学援隊と連携して登下校指導や定期的な見回りを行い、安全指導や危険箇所の共通理解を図る。 ②様々な状況を想定した避難訓練や防災防犯教室を行うことで、子どもの防災防犯に対する意識を高める。 ③安全点検、安全研修など意図的に計画を行い、教職員の危機管理意識を常にもって取組めるようにする。	①PTA、学援隊と連携して登下校指導や定期的な見回りを行い、安全指導や危険箇所の共通理解を図ることができた。 ②教師や子どもの防災防犯に対する意識を高めることはできたが、引き取り訓練を3年間でできていない。防犯訓練は、職員全員が現場の経験をするところを、今まで経験のない職員を優先して現場対応に配置する。 ③安全点検、安全研修などは意図的に計画を行った。教職員の危機管理意識をもっと取組むことができた。	B
ブロック内評価後の気づき	今年度は、3年ぶりに小中交流一貫で中川小学校での授業研究会を実施することができた。教科別に参観した授業について、9年間を通して育てていきたい資質・能力について共有することができた。小学校では、掲示物や楽しい活動を活用して学習を進めることができていた。小学校でロイノートを活用して経験が、中学校になってくると活用していることが確認できた。ICTの活用したり、対話をしたりしながら学び合う姿が見られた。ブロック内で行事の進め方や児童の様子を情報交換しながら進められたことが、児童理解へとつながった。	5月には、ブロックで防災訓練を実施することができた。事前に日程や内容を確認し、保護者の動きなども見ることができ、とても有意義な訓練だった。6月・1月の授業研究会を通して、中学校に送り出した子どもの様子や小学校での学びについて、9年間育てていきたい資質・能力について情報交換できた。ICTの活用は、小学校と中学校で機器が異なるため、使い方が共有できるとよりよいという意見もあった。また、特別な配慮を要する子どもたちへの支援についても、継続した見守りが必要だと感じられた。	
学校関係者評価	・修学旅行や体験学習など、行事が戻ってきているのがよかった。子どもたちのために、考えたうえで実践されていることが分かった。 ・午前5コマになって、宿題時間の確保ができ、家でゆとりをもって過ごしている。異学年交流も進められていて、とてもよいと感じる。 ・支援員などで入っているが、先生方は頑張っていると感じる。午前5コマの取組では、働き方改革につながる。	・子どもたちが笑顔で授業に参加している様子が見られ、成長が分かる。保護者の方々も楽しそうに参観している。 ・先生方が、子どもが考える授業を実施していることがよかった。活発に発言し、考えることに時間をかけていることがよかった。 ・地域学校協働本部として家庭科の作品作りのサポートを行い、全員が作品を完成させることができていたのがよかった。1年生のエプロン先生など、支援を継続していきたい。	
中期取組目標 振り返り	中期学校経営方針についての理解を深めるため、年度初めの全体での話し合いを行い、その後具体的取組につなげていく。前期末や後期の途中などで振り返りを行いながら進めていく。コロナ禍ではあったが、内容や方法を工夫しながらできる活動を進めることができた。持続可能な働き方モデル事業の取組で、教材研究や研修に多くの時間を設定し具体的取組の成果や課題を考え、子どもの姿で話し合い、進めることができた。来年度は、今年の経験を生かして、時間を有効に使いながら教育活動を進めていきたい。	中期学校経営方針に具体的取組や進め方を部会で話し合う機会を増やし、それぞれの立場で進めることができた。そのおかげで、子どもたちが落ち着いて学校生活をおくることができた。コロナ禍が明け、特別活動を中心に子ども同士が関わり合う活動が増えてきた。地域の方々との交流も増え、集団での関わりを通して、豊かな心が育ちつつあることも感じている。持続可能な働き方のモデル事業への取組が3年目となり、日課や裁量の時間の使い方など、ゆとりをもって教育活動を進めることができた。	

重点取組分野	令和5年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①学力・学習状況調査等の結果分析や学年グランドデザインに基づきカリキュラムマネジメントに取組む。 ②各教科等で、児童の問題発見・解決能力を育成する授業づくりに取組む。 ③ICT活用や時程の工夫により、さらに質の高い柔軟な教育課程編成に取組む。	①各学年の実態から目指す子どもの姿を具体化したグランドデザインをもとに、授業づくりに取り組んだ。また中間のふり返りを、カリキュラムマネジメントに生かすことができた。 ②各教科で、児童の既習履歴や生活経歴を見とり、子どもたちが問題意識をもつことができるような事実や体験を重ねることで、問題発見につなげることができた。 ③教師が積極的に活用することで、子どもも有効に活用できるようになってきた。今後はさらに学習を深めるツールとしての活用方法を模索していく。	B
豊かな心	①自らを振り返り、よりよく生きようとする豊かな心を育むため、学級経営を基に道徳の時間の充実を図る。 ②豊かな感性が育まれるよう、地域など様々な方々と関わり、「本物」に触れるような体験的活動を行う。 ③相手を思いやる心を育むため、掲示板を活用し子どもが主体的に活動できるフレンドタイムや全校連立等、設定する。	①自らを振り返り、よりよく生きようとする豊かな心を育むため、学級経営を基に道徳の時間の充実を図ることができた。 ②豊かな感性が育まれるよう、出前授業や牛っこだんぼを通して地域など様々な方々と関わり、「本物」に触れるような体験的活動を行うことができた。 ③相手を思いやりながら、目的意識をもって子どもたちが主体的に活動することができた。フレンドタイムや全校連立等を行うことで、チームごとに仲間意識を醸成し関係を深めることができた。	B
健やかな体	①一校一実践として、体育での短縄跳び、〇分間走など個の持久力が高まる運動を継続的に実施する。 ②心と体の成長のため、保健や体育の授業の充実を図り、生涯、生きてはたらく力となるよう支援する。 ③給食指導を中心に様々な教科・領域を通して、食育の充実を図る。	①ベア学年で縄跳び集会を行うことで縦のつながりを意識しつつ、学ぶことができた。互いに相乗効果があると考えている。 ②UCLが体育になったことで「体育が好き」「健康・運動っていいな」という児童が増え、運動が苦手な児童でも運動の時間や練習などに触れてみる機会が増えた。保健では養護教諭が授業に入り、心と体の成長について知り、自分の体でかき立てるような話があった。 ③牛久保タイム等を活用し、月1回バランススイナーワークに取り組み始めるようにした。また家庭科、生活科、国語、特別活動等で担任と連携した食に関する授業を実施することができた。	B
地域連携	①保護者、地域と、牛っこだんぼを通して、生活・総合など学習を中心に積極的に関わり、関係を深める。 ②地域を愛する子どもたちを育成するため、地域の行事等に子ども、教職員もできる限り参加する。 ③学校の様子、子どもたちの学び、活動を地域に発信していく。	①生活・総合を中心に、地域の魅力ある人材と関わることで、地域をよりよく知ろうという態度の育成につながった。 ②教職員が積極的に参加することで、児童の参加を促したものの、積極的な参加にはつながりづらかった。今後も継続して取り組んでいく。 ③ホームページを毎月更新することで、学びの地域発信につなげた。今後はさらに地域と関わる学びを振り返り、発信に努めていく。	B
いじめへの対応	①子ども主体となるよう、いじめ未然防止の話し合いを代表委員会や子ども会議で行い、活動につなげる。 ②ハートフルウィーク、学校生活アンケートを定期的に行い子どもの実態を把握し、いじめの未然防止、早期発見、解決につなげていく。 ③意図的に教職員の研修を行い、スキルアップを図る。	①子ども会議では、代表児童が学校代表で参加し、積極的に意見を出すことができた。校内での発信、活動につなげることができた。 ②ハートフルウィーク、学校生活アンケートを定期的に行い子どもの実態を把握し、いじめの未然防止、早期発見、解決につなげることができた。 ③意図的に教職員の研修を行い、スキルアップを図ることができた。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチームにミドルリーダーや主幹教諭が関わることで、指導力、授業力の向上を図る。 ②日課表やチーム学年経営による一部教科分担当制などで教職員の裁量の時間を確保する。 ③主幹会、教務会、学年主任会、UCL(共同研究)等、ベテランの教職員のよさが生きる組織運営を継続し、内容を共有する。	①様々な教科・領域での授業研究を行い、指導力、授業力の向上を図った。 ②授業の進め方や教材の共有、裁量の時間の活用を通じて、授業の質の向上につながった。時間を意識した働き方が目立つようになった。 ③それぞれの会で情報共有したり、縦、横のつながりを考えたりしながら研修を進めることができた。	B
特別支援教育	①配慮を要する子の個別の指導計画を保護者と共通理解の上、作成し、その子に応じた指導支援を行う。 ②特別支援教室では、子どもの困り感に寄り添い、国語・算数を中心に基礎基本の習得をめざす。 ③SCやSSW、子ども家庭支援課など外部機関との連携し、保護者も含め個に応じた適切な指導支援を行う。	①配慮を要する子の個別の指導計画を保護者と共通理解の上、作成し、その子に応じた指導支援を行うことができた。 ②特別支援教室では、子どもの困り感に寄り添い、国語・算数を中心に基礎基本の習得をめざすことができた。 ③SCやSSW、子ども家庭支援課など外部機関との連携し、保護者も含め個に応じた適切な指導支援を行うことができた。	B
人権教育 児童指導	①人権教育を人権週間等を中心に学年に応じて系統立てて学ぶ機会を意図的につくる。 ②月別目標やあいさつ運動など子どもが主体的に児童会で話合ったり発信したりするよう時間を確保する。 ③児童指導に関する諸問題を随時、専任を中心に教職員全体で実態を把握し、組織的に対応する。	①人権教育を人権週間等を中心に学年に応じて系統立てて学ぶ機会を意図的につくる。 ②月別目標やあいさつ運動など子どもが主体的に児童会で話合ったり発信したりするよう時間を確保する。 ③児童指導に関する諸問題を随時、専任を中心に教職員全体で実態を把握し、組織的に対応することができた。	B
未来を拓く志	①「人・もの・こと」にこだわり、本物との出会いを大切に生活科・総合的な学習の時間の授業をめざす。 ②「分かる」楽しさ、「できる」喜び、「認められた」心地よさを感じる魅力ある授業をし自己肯定感につなげる。 ③話し合い活動の充実を図り、価値観が違っても、協働して困難な課題に立ち向かおうとする力をつける。	①本物との出会いで、子どもの心が動き、切実な問題意識をもって取り組む授業づくりを学校全体で進めていった。 ②個を生かし、協働的に学ぶ授業づくりを推進して、自己肯定感を育む取り組みを行った。 ③話し合い活動は充実して行われた。引き続き多角的な立場から協働的に困難に取り組む子どもの姿を目指す授業づくりを行っていく。	B
安全管理	①PTA、学援隊と連携して登下校指導や定期的な見回りを行い、安全指導や危険箇所の共通理解を図る。 ②様々な状況を想定した避難訓練や防災防犯教室を行うことで、子どもの防災防犯に対する意識を高める。 ③安全点検、安全研修など意図的に計画を行い、教職員の危機管理意識を常にもって取組めるようにする。	①PTA、学援隊と連携して登下校指導や定期的な見回りを行い、安全指導や危険箇所の共通理解を図ることができた。 ②様々な状況を想定した避難訓練や防災防犯教室を行うことで、子どもの防災防犯に対する意識を高めた。 ③安全点検、安全研修など意図的に計画を行い、教職員の危機管理意識を常にもって取組めるように努めた。取り組みの様子は、動画等で記録し、いつでも振り返ることができるようにすることも必要と考えた。	B
ブロック内評価後の気づき	今年度は、3年ぶりに小中交流一貫で中川小学校での授業研究会を実施することができた。教科別に参観した授業について、9年間を通して育てていきたい資質・能力について共有することができた。小学校では、掲示物や楽しい活動を活用して学習を進めることができていた。小学校でロイノートを活用して経験が、中学校になってくると活用していることが確認できた。ICTの活用したり、対話をしたりしながら学び合う姿が見られた。ブロック内で行事の進め方や児童の様子を情報交換しながら進められたことが、児童理解へとつながった。	5月には、ブロックで防災訓練を実施することができた。事前に日程や内容を確認し、保護者の動きなども見ることができ、とても有意義な訓練だった。6月・1月の授業研究会を通して、中学校に送り出した子どもの様子や小学校での学びについて、9年間育てていきたい資質・能力について情報交換できた。ICTの活用は、小学校と中学校で機器が異なるため、使い方が共有できるとよりよいという意見もあった。また、特別な配慮を要する子どもたちへの支援についても、継続した見守りが必要だと感じられた。	
学校関係者評価	・修学旅行や体験学習など、行事が戻ってきているのがよかった。子どもたちのために、考えたうえで実践されていることが分かった。 ・午前5コマになって、宿題時間の確保ができ、家でゆとりをもって過ごしている。異学年交流も進められていて、とてもよいと感じる。 ・支援員などで入っているが、先生方は頑張っていると感じる。午前5コマの取組では、働き方改革につながる。	・子どもたちが笑顔で授業に参加している様子が見られ、成長が分かる。保護者の方々も楽しそうに参観している。 ・先生方が、子どもが考える授業を実施していることがよかった。活発に発言し、考えることに時間をかけていることがよかった。 ・地域学校協働本部として家庭科の作品作りのサポートを行い、全員が作品を完成させることができていたのがよかった。1年生のエプロン先生など、支援を継続していきたい。	
中期取組目標 振り返り	中期学校経営方針についての理解を深めるため、年度初めの全体での話し合いを行い、その後具体的取組につなげていく。前期末や後期の途中などで振り返りを行いながら進めていく。コロナ禍ではあったが、内容や方法を工夫しながらできる活動を進めることができた。持続可能な働き方モデル事業の取組で、教材研究や研修に多くの時間を設定し具体的取組の成果や課題を考え、子どもの姿で話し合い、進めることができた。来年度は、今年の経験を生かして、時間を有効に使いながら教育活動を進めていきたい。	中期学校経営方針に具体的取組や進め方を部会で話し合う機会を増やし、それぞれの立場で進めることができた。そのおかげで、子どもたちが落ち着いて学校生活をおくることができた。コロナ禍が明け、特別活動を中心に子ども同士が関わり合う活動が増えてきた。地域の方々との交流も増え、集団での関わりを通して、豊かな心が育ちつつあることも感じている。持続可能な働き方のモデル事業への取組が3年目となり、日課や裁量の時間の使い方など、ゆとりをもって教育活動を進めることができた。	